早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University

NEWS LETTER

ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表　岡室 美奈子

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2009年度より2013年度まで文部科学省より共同利用・共同研究拠点として認定を受け、研究活動を推進してきました。その実績が評価されてこの度再認定を受け、2014年4月より6年間、第2期として活動を継続することとなりました。またみなさまに本ニューズレターをお届けできることを心から嬉しく存じます。今号より日英2か国語とし、国際的発信力を強化しました。

本拠点は、学外の研究者・諸機関と演劇と映像をテーマとする共同研究を行い、2002度採択の21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」、及び、2007年度採択のグローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」によって蓄積された研究資産の、より一層の社会還元と有効活用をはかることを目的としてきました。

第1期において、本拠点は多数の研究チームを擁し、演劇映像研究の発展に大きく寄与してきたと自負しています。拠点が研究テーマを提案するテーマ研究と、拠点の研究資源の有効利用を前提とする公募研究とを行い、公募研究の推進は若手研究者にも広く門戸を開放して研究の機会と環境を提供し、研究資源を共有するという演劇博物館の理念を継承・発展させるものでした。研究成果は、多数のシンポジウムや研究会、ホームページや出版物を通じて発表され、上映会や展覧会の開催等、演劇博物館ならではの方法によって広く社会に還元されました。

第2期においては、上記の方針をさらに推し進め、百万点を超える膨大な資料を収蔵するアジアで唯一の演劇専門博物館が母体であるという利点を活かし、演劇博物館に収蔵されながらいまだ充分に学術的に活用されていない貴重な未発表資料群を研究資源として提供するという方針を打ち出しました。未発表資料群のリストをホームページ上で公開して公募研究を募り、学外の専門家を中心とする研究計画委員会において厳正な審査により4件を採択し、テーマ研究1件と併せて、5チームが現在研究活動を行っています。第1期よりも規模は小さくなったものの、この新しい方針は貴重な学術資料を演劇博物館や限られた研究者で占有するのではなく、文化資源として共有するための新しい試みとして位置づけられるでしょう。研究チームのみなさまのご努力のおかげで、初年度から貴重な資料の発掘・考証が進むなど、予想以上の成果が上がっています。今後も豊富な研究資源と研究環境の共有化を図り、国内外の演劇映像研究を牽引して学術研究の推進に寄与するとともに、研究成果を広く社会に還元することを目指していきたいと考えています。みなさまのご支援とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

contents

■拠点代表あいさつ　1 p
■平成26（2014）年度　テーマ研究成果報告　2 p
■平成26（2014）年度　公募研究成果報告　3～6 p
■Mission and Vision　7 p
■Report on principal research findings, fiscal 2014　8 p
■Report on selected research findings, fiscal 2014　9 p

February 2015
Number. 5

○テーマ研究
テーマ研究は本拠点が提案したテーマに関する共同研究プロジェクトで、研究者の参加を広く呼び掛けるものです。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は本ニューズレター編集時のものであり、現在のものとは異なる場合があります。

テーマ研究 1

寺山修司の創作～一次資料から明らかにする活動実態～

研究代表者：塚原史（早稲田大学法学学術院教授）
研究分担者：岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授）、梅山いつき（早稲田大学演劇博物館助教）

【研究目的】

本研究は寺山修司の創作について、演劇博物館が所蔵している関連資料と寺山の秘書を長年務めておられた田中未知氏が所蔵する資料をもとに明らかにすることを目的としている。演劇博物館は主に書籍や映像資料、チラシやパンフレット類、そしてわずかではあるが台本と手稿を所蔵している。ところが多岐に及ぶ寺山の創作活動の実態を明らかにするには種類が限られており、寺山の創作活動の全体像をつかむにはいささか困難な状況にある。現在、演劇博物館に寄託されている田中氏所蔵の寺山関連資料の中には、創作の一端を垣間みることのできるメモや創作過程で参考にしたと思われる資料が多く含まれている。また蔵書の中には学生時代の愛読書や、エッセイ「不思議図書館」を執筆するにあたって寺山が参照した外国語書籍もある。本研究ではそうした資料を複数の分野の専門家と共に考証することによって、寺山の創作の源泉となったであろう思想的背景や交友関係を明らかにすることを目的としている。関係資料をもとに文化的体験や影響を与えた作家、作品を調べ、作品を特徴付ける要素が何をもとに構築されたのかを明らかにしたい。

【研究成果の概要】

①資料のデジタル撮影

・写真アルバム

18冊のアルバムに収められている紙焼き写真のデジタル撮影を行った。アルバムは、田中氏によってまとめられたもので、「1968年頃」や、「1970年NYラ・ママ」、「競馬関係」、「演劇関係」といったタイトルが付けられており、年代や仕事分野別でまとめられているが、内容の詳細は未調査である。1冊あたり約50枚収められており、今後は画像ファイルを研究チームで共有し、研究会を定期的に開催して考証作業を進める。写真の被写体の特定等においては田中氏に適宜協力を要請する。

・スクラップブック

寄託資料に含まれるスクラップブックは寺山自身が作成したものや、劇団関係者が作成したもの、田中氏が作成したものを合わせて100冊近くある。大半が田中氏によって整理済みであることから、おおまかな内容については特定ができているが、収められている記事一点一点まで把握できていない。今回は1960年代半ばから70年代初頭にかけて寺山自身が作成したスクラップブックを調査対象とした。この時期の寺山は文学の分野だけでなく放送作家としても活躍し、テレビの構成やラジオ台本を手がける一方で、演劇実験室・天井桟敷を旗揚げし、話題を集めていた。スクラップブックにはそうした活動を取り上げた雑誌・新聞記事や、雑誌への投稿エッセイ、対談がくまなく収められている。今後は画像データを用いて記事リストを作成する予定である。

②蔵書リストの作成

書籍約1,300冊のリスト化作業を行った。これらの書籍は寺山の蔵書であり、中には学生時代に愛読したと思われる書籍や、外国書籍も多く含まれ、一部は入手が難しい貴重書もある。分野は多岐に及び寺山の関心の広さを伺い知れる。今回の調査では書誌情報として著者名、書名、出版社名、出版年をひかえてリストを作成した。

■平成26（2014）年度
公募研究成果報告

○公募研究
公募研究は審査を経た研究計画に基づく複数の共同研究プロジェクトにより構成され、演劇博物館の収集品の有効利用を目指すものです。プロジェクトに対し、本拠点は共同研究の場と資料を提供します。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は本ニューズレター編集時のものであり、現在のものとは異なる場合があります。

公募研究 1

坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究

研究代表者：濱口久仁子（立教大学異文化コミュニケーション学部兼任講師）
研究分担者：菊池明（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、松山薫（早稲田大学図書館専任職員）、小島智章（武蔵野美術大学非常勤講師）、水田佳穂（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、柳澤和子（早稲田大学教育総合科学学術院非常勤講師）

【研究目的】

演劇博物館に収蔵される坪内逍遙・士行関係資料には未整理のものが多く残されている。自筆原稿や逍遙宛書簡など膨大な量に及ぶ逍遙資料については、依然個別の調査が及んでおらず、資料番号登録がなされていないものも少なくない。また士行資料については、十数年前に寄贈された当時のまま保管されており、内容の確認、整理作業に着手できていないのが現状である。本研究では、これらの資料の全体像を把握したうえで、研究期間内に実行可能な範囲で優先順位をつけながら調査を行い、今後の研究に資する、詳細な目録を作成することを計画している。

【研究成果の概要】

○坪内逍遙資料（坪内逍遙宛書簡）

現在、逍遙宛書簡に仮番号を付与しながら、リストを作成中である。書簡の状態は、1通の封筒に数通が雑多に収められているもの、黴の発生など保存状態の良くないものも多く、その点に十分留意しながら進めている。番号を付与した書簡は差出人別に分けて撮影、データ化し、考証翻刻作業へと移行する予定である。

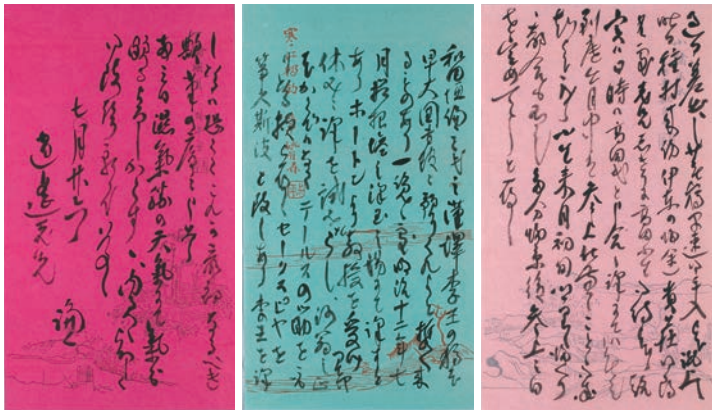
今年度の書簡の撮影は、未整理書簡約1800通の内、約800通を予定している。撮影書簡は、一昨年に刊行された『坪内逍遙書簡集』に収録の逍遙書簡の宛先人と逍遙の親族、計84名の書簡を中心に選定した。それらの書簡は『坪内逍遙書簡集』掲載書簡との関連が予想され、今後年代考証や内容調査、翻刻を進めることにより、逍遙の活動や当時の背景、交流において新たな発見が期待されることも選定理由のひとつである。更に逍遙と交流のあった同時代の文化人・演劇人・文学者の資料としても貴重である。

○坪内士行資料

士行資料は現在ダンボール20箱のうち5箱を開封、書簡・写真・肉筆メモ・上演チラシ・関連書類等の整理を開始した。逍遙資料と同様劣化したものも多く、保存作業も併せて進める必要がある。今年度は書簡を差出人のグループごとにまとめる作業が中心となり、順次リストを作成する予定である。

士行資料については未だ全容を把握しきれていないが、英米滞在時代や、宝塚少女歌劇時代の貴重な資料が多数保存されていることがわかった。また肉筆原稿の中から、士行の日録が発見された。今後、坪内士行とその周辺の人々の活動が明らかになることを期待している。

1930年4月宝塚大劇場短期公演チラシ　水谷八重子出演
（水谷八重子一座・宝塚少女歌劇・宝塚国民座合同公演）
Flyer from the Takarazuka Grand Theater (April 1930), with Yaeko Mizutani in the starring role



坪内逍遙宛市島春城書簡（1926年7月26日）
Letter to Shoyo Tsubouchi from Shunjo Ichijima (July 26, 1926)

公募研究 2

無声映画の上演形態、特に伴奏音楽に関する資料研究

研究代表者：長木誠司（東京大学大学院総合文化研究科教授）
研究分担者：紙屋牧子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、白井史人（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）、山上揚平（東京藝術大学音楽学部非常勤講師）

【研究目的】

演劇博物館所蔵の無声映画の伴奏に使用された楽譜資料を対象とし、大正～昭和初期の映画上演の実践を、特に音楽面に着目して明らかにすることが本研究の目的である。楽譜資料の詳細な分析や録音資料との比較など、音楽学の知識・方法論を用いる点に本研究の特色がある。資料の目録作成・データベース化、手稿譜の浄書、既存楽譜資料との比較検討、さらに関連する文献資料の収集・検討を行う。以上の作業を通して、音楽と映像との組み合わせを含めた当時の実践を具体的に再構成することを目指す。

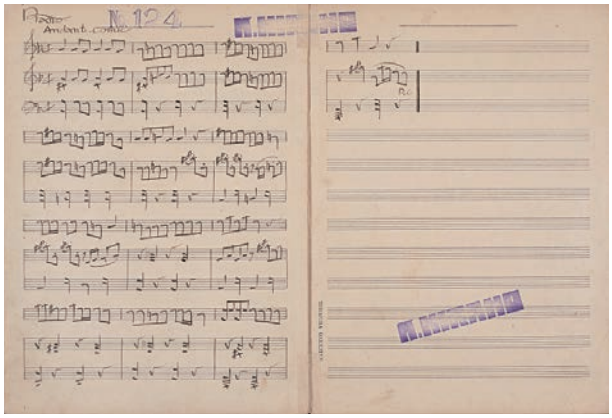
【研究成果の概要】

研究分担者・白井、紙屋、研究協力者・柴田康太郎（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）を中心とした調査で、資料の概要が明らかとなった。当資料は、1920年代の半ばから1930年代初頭にかけて、無声映画の伴奏に用いられた一まとまりの楽譜コレクションである。署名と所蔵印から、品川の日活直営の「娯楽館」が所蔵していた伴奏音楽用パート譜であり、「平野 」（※K.HIRANO, HIRANO KINREIの印あり）という人物が中心的に使用していたと考えられる。調査開始時の状態（段ボール2箱、計14の袋に分蔵）に従って番号付けした結果、現時点で資料点数は600点を超えた。内容は以下に大別される。

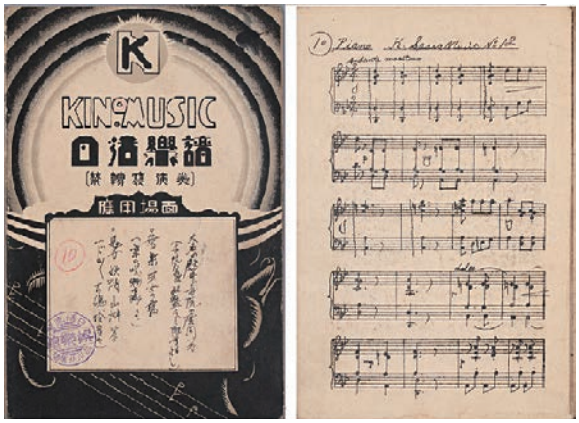
① 無題（仮名称：ヒラノ・ライブラリー）の手稿伴奏曲集、パート譜、約120曲（K.HIRANO という印入り）
② 「Kino Music 日活楽譜」、未出版の伴奏曲集、パート譜、33曲
③ 「Small Orchestra」、国内出版の伴奏曲集、パート譜、25曲（東京スモール・オーケストラ楽譜会、1924年）
④ 「Cinema Inc. Series」「Berg's Inc. Series」、アメリカ出版の伴奏曲集、パート譜、約110曲、（Belwin社、1910年代後半に出版か）
⑤ その他（使用頻度が低いパート譜、映画題名が記載されたソロ・パート譜、キュー・シート数点など）

主要資料館の専門家との面談によれば、当時の使用譜がまとまって発見されたのは国内初である。各曲集の内容に関しては、仮目録の作成と並行して分析を進めている。佐々紅華、松平信博ら、当時の言説で言及される作曲家の実作も多く含まれていることが分かった。さらに、Belwin社出版の伴奏曲集（④）は、当時のアメリカで使用されていた主要曲集の一つであり、海外の実践との繋がりが明らかとなってきた。また、既存資料では欠けていたピアノパートなどの伴奏部分の分析を通して、和声面での和洋折衷的特徴や楽器編成の検討を行った。

映像との対応の再構成は今後の課題である。現時点では、数点のキュー・シート、日活楽譜（②）に記載された伴奏場面例、映画作品名の記載を含む資料の分析に加え、関連映像作品の観覧、品川娯楽館に関する週報、パンフレットなどの資料収集・検討を進めている。



「無題手稿伴奏曲集」より
From “the collection of untitled hand-written musical accompaniment”



「Kino Music 日活楽譜」より「K. Sassa Music No. 12」
From “the Kino Music Nikkatsu Gakufu” “K. Sassa Music No.12”

公募研究 3

プロジェクション・メディアの考古学：幻燈資料の整理・公開とデジタルデータを活用した展示・創作

研究代表者：大久保遼（東京藝術大学社会連携センター教育研究助手）
研究分担者：草原真知子（早稲田大学文化構想学部教授）、向後恵里子（明星大学人文学部准教授）、上田学（日本学術振興会特別研究員）、遠藤みゆき（早稲田大学文学研究科博士課程）、齋藤達也（株式会社アバクス代表取締役）、加藤公太（東京藝術大学アートイノベーションセンター教育研究助手）、桒原寿行（東京藝術大学社会連携センター教育研究助手）

【研究目的】

演劇博物館には、世界的に見てもきわめて貴重な映画前史の映像文化に関する資料が数多く収蔵されている。今回の共同研究では、演劇博物館に所蔵されている幻燈スライドのコレクションの体系的な整理を行い、今まで明らかにされてこなかった所蔵スライドの年代や題材の特定を進める。またこうした調査に加え、その成果を展示や図録、データベースなどによって公開・共有し、その価値や新しい表現の可能性を探ることを目指す。

【研究成果の概要】

○資料調査

演劇博物館に所蔵されている写し絵、幻燈資料の閲覧を行い、まずは資料体の概要と保存状態を把握することからはじめた。また共同研究チームで草原真知子氏所蔵の幻燈コレクション、販売目録等の関連資料を閲覧し、演劇博物館所蔵のスライドと販売目録を照合することで、年代や題材の特定が進むとの見通しを得た。なお今後、投影装置の修復や復原を行っていく必要があることも明らかになった。

○館蔵スライドカタログ

館蔵スライドのなかから、350点ほどを厳選し、テーマ別に構成を行った。現在、基本的な画像の選定とレイアウトはほぼ完了し、共同研究チームと外部の有識者による解説の執筆が進んでいる。カタログは今年度内に青弓社より刊行予定。

○幻燈データベース

資料調査やスライドカタログを編集する過程で得られたデータを追加する作業を現在行っている。今年度中に確定した情報を追加した上で、データベースの更新を行い、館蔵スライドの全画像データを公開する予定である。今後、写し絵の画像データや販売目録のデータを統合していくことを検討している。

○企画展示

資料調査と館蔵資料のデジタル化等の成果を踏まえた企画展示が4月1日より演劇博物館で予定されている。今年度は展示に向けて、出品資料の選定、展示解説の作成を行った。またデザインチームによるメインビジュアルと特設webの作成が進んでいる。展示レイアウトの基本方針もほぼ固まり、縮小模型を作成しながら調整を行っている。

河童が釣れた
Fishing for *kappa* (water imps)

竜巻
Tornados

ハムレットとオフィーリア
Hamlet and Ophelia

二枚舌
Duplicity

写真家と子供
Photographer and child

福助
Fukusuke (a large-headed dwarf statue, bringer of good luck)

勧進帳
Subscription book

公募研究 4

千田是也と同時代演劇―千田資料に関する調査・研究

研究代表者：阿部由香子（共立女子大学文芸学部准教授）
研究分担者：宮本啓子（白百合女子大学国語国文学科非常勤講師）、寺田詩麻（白百合女子大学国語国文学科非常勤講師）、秋葉裕一（早稲田大学創造理工学部教授）

【研究目的】

千田是也コレクションは、2001年4月に千田是也の長女中川モモコ氏により寄贈された遺品、旧蔵書、演劇資料でありダンボール300箱以上（受入時）にもおよぶ膨大な資料である。それらの資料は大まかな分類と整理が進み、特に図書資料とアルバム、スクラップブック、カードなどの資料は2005年より閲覧可能な状態にある。

しかし、現段階では未だ資料の仮整理に過ぎず、膨大な資料の内容がどのようなものなのか把握できていないようである。

一方で、資料の劣化も進み、特に写真資料については早急にデジタル化を進め、原資料の適切な保存をする時期にきていると思われる。

今回のプロジェクトでは、全体のほんの一部分にすぎないが、「J：伊藤道郎関係」資料のアルバムと上演資料の内容を確認し、伊藤道郎やアーニーパイル劇場に関する研究に活かせるような基礎資料を整理し、かつデジタル化を進めることを目的とする。

【研究成果の概要】

実質二ヶ月ほどの短期間であるため、対象とする千田資料の概要を把握し、伊藤道郎関連の写真アルバム20数冊の内容を検証しはじめばかりである。

写真アルバム20数冊のデジタル化と、写真1点ずつのデータをとる作業を進めている。具体的には千田是也コレクションのうち、J分類が伊藤道郎関連の資料であり、そのうちJ1-1～J1-20は写真アルバム資料である。アルバム20冊は「MICHIO ITO 1.」のようにタイトルが付され、写真にもキャプションや裏書きがかなり残されている。今回対象とする写真資料のデータベース構築は十分可能であろう。

一方で、J分類には道郎がたずさわったハリウッド・ボール関連、アーニーパイル劇場関連、オリンピック関連などに関する雑多な資料も数多く含まれている。書簡、名簿、メモ、スケッチ、台本原稿など、多様な形態の資料をバラバラにすることなく、デジタル化と整理を進めることが出来れば、横断的な資料の活用が可能となり、新たに明らかになることが数多く見出されるに違いない。今回はその手始めとして、J23（アーニーパイル劇場関係資料）を精査し、いくつかの演目の上演資料、写真資料、伊藤熹朔舞台装置画などと関連を明らかにし、公演の実態を明らかにすることを目指している。

スクリアピン作曲『プレリュード』を踊る伊藤道郎
Michio dances to “Prelude” by the Alexander *Scriabin*

伊藤道郎演出のアーニーパイル劇場公演『タバスコ』（1947）
Photograph of Michio Ito performing on the stage of the Ernie Pyle Theatre

アーニーパイルのダンシングチーム
The Ernie Pyle dance troupe

アーニーパイルの踊り子たちをレッスンする伊藤道郎（1947）
Michio gives a lesson to the Ernie Pyle’s dancers

Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Minako Okamuro

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, which is managed by the Waseda University Tsubouchi Memorial Theatre Museum, carried out research activities after being nominated as a Joint Usage/Research Center by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology between fiscal years 2009 and 2013. Based on the evaluation of its performance, it has been nominated by the Ministry for another six years (starting from April 2014) and is currently continuing its activities into this second period. It is my pleasure to issue the newsletter again. This edition will be published in both Japanese and English, strengthening our ability to communicate with an international readers.

At the Institute, joint research on the themes of theatre and film is carried out in collaboration with outside researchers and various other institutions; our objective is to further contribute to society through the research assets that we have accumulated through the 21st Century Center of Excellence (CEO) Program "Development of Research and Study Methodologies In Theatre" (2002-2006), and the CEO Program of the International Institute for Education and Research in Theatre and Film Arts (2007-2011), and to make effective use of these assets.

During the first period, the Research Institute was home to many research teams, and we awere proud of the major contribution they made to theatre and film research. The Institute carried out research on proposed themes and selected research, a perquisite of which was the effective use of the Institute's research resources. By inviting researchers to submit proposals, the Institute opened its doors wide to young researchers and provided them with research opportunities and a research environment. In addition, by sharing its research resources, it was both inheriting and developing the concept behind the Theatre Museum. We published research findings using a wide range of approaches, including symposiums, research workshops, the Museum's homepage, and publications. In addition, we shared them extensively with the public through events (including movie screenings and exhibitions) that could only take place in a facility such as the Theatre Museum.

During the second period, we will further advance these initiatives, taking full advantage of our links to Asia's only museum specializing in the theatre and its enormous collection of artifacts and related materials—in excess of one million items. It is our current policy to offer, as research resources, all valuable, undocumented artifacts and materials stored at the Museum that have not been fully utilized academically. We publish the list of these undocumented artifacts on the Museum's homepage and invite proposals for our selected research program. The Examining Commitee of Research Planning, mainly comprised specialists from outside the University, recently selected four proposals, following a strict selection process. As one themed research project joins these four selected research projects, we currently have five teams engaged in research. Though the number of the groups is smaller than during the first period, our new policy might be described as an attempt to ensure that our valuable academic materials become a cultural resource that is shared by all, not monopolized by the Theatre Museum or a limited number of researchers. In fact, thanks to all the efforts of the researchers involved, the excellent fruits have been produced through their investigation of the materials. Going forward, we aim to share our abundant research resources and research environment, becoming a driving force both domestically and internationally that promotes theatre and film research and helps to generate academic research, while making all research findings widely available to the public.

We would greatly appreciate your assistance and continued support in the future.

○Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Institute, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members listed below were accurate at the time this newsletter was edited, but may have changed subsequently.

Principal research 1

The creative works of Shuji Terayama — the actual circumstances of his activities, as clarified by primary materials

Principal Researcher: Fumi Tsukahara (Professor, Faculty of Law, Waseda University)
Collaborative Researchers: Minako Okamuro (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University), Itsuki Umeyama (Assistant Professor, Waseda University Theatre Museum)

Research objective

This research aims to detail the creative works of Shuji Terayama, using materials in the collection of the Theater Museum, as well as those provided by Michi Tanaka, who worked as Terayama's secretary for many years. The Theatre Museum mainly holds books, video materials, flyers, and pamphlets, together with a small number of scripts and manuscripts. These limited categories make it difficult to appreciate the full extent of Terayama's creative activities, which were extremely diverse. The materials belonging to Ms. Tanaka, now held in the Theatre Museum, include many memos, from which we can catch a glimpse of one part of his creative life, as well as reference materials used in his creative process. Moreover, within the collection are Terayama's favorite books from his school days and the foreign language books he mentioned in his essay, "The Mysterious Library." These materials are being studied as historical evidence by specialists in a number of fields, in order to clarify his ideological background and understand his relationships with friends and acquaintances, thought to be the inspiration for Terayama's creative works. The aim is to use these materials to investigate Terayama's cultural experiences and the authors and works that influenced him, in order to understand how he developed the elements that characterized his work.

Summary of the research findings

① Digital photos of the materials

・Photo albums

Digital photographs were taken of printed photos that had been collected into 18 photo albums. The albums had been compiled by Ms. Tanaka, who had entitled them, "Around 1968," "La Mama, New York, 1970," "Horse-racing related," and "Play related." While they had been arranged by time period and field of work, their content had never been investigated in detail. There were approximately 50 photographs per album; in future, these image files will be shared with the research team, research meetings will be regularly held, and the work of historical investigation will progress. Ms. Tanaka's cooperation has been requested for the task of identifying the subjects of the photographs.

・Scrapbooks

The scrapbooks included in the materials received from Ms. Tanaka were created by Terayama himself, together with people associated with the theatrical company. Together with the ones made by Ms. Tanaka, there were close to 100 scrapbooks in total. As the majority had already been sorted by Ms. Tanaka, it was possible to roughly identify the content, but it was not possible to understand every aspect of the article collections. The subjects of investigation in this research are the scrapbooks created by Terayama himself from the middle of the 1960s to the beginning of the 1970s. During this time, Terayama was not only a literary author, he also wrote for TV and radio. At the same time, it was during this period that he founded the experimental theater troupe Tenjo Sajiki, which generated much interest. The scrapbooks contain all of the magazine and newspaper reviews of his work, as well as the essays he wrote for magazines and interviews. Going forward, the plan is to use the image data to create a list of articles.

② Cataloguing of the library

The cataloguing of the Terayama's library of approximately 1,300 books is completed. The library consists of books Terayama supposedly enjoyed in his school days, foreign books, and rare books difficult to obtain.

The library covers a variety of fields, indicating the breadth of Terayama's interests. In the catalogue, the author name, book title, publisher name, and publication year are registered as bibliographical information.

○Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Institute provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members listed below were accurate at the time this newsletter was edited, but may have changed subsequently.

Selected research 1

Basic research survey of materials relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi

Principal Researcher: Kuniko Hamaguchi (Affiliated Lecturer, The College of Intercultural Communication, Rikkyo University)

Collaborative Researchers: Akira Kikuchi (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Kaoru Matsuyama (full-time staff, Waseda University Library), Tomoaki Kojima (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Kaho Mizuta (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Kazuko Yanagisawa (Part-time Lecturer, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University)

Research objective

Stored in the Theatre Museum, there remain many materials related to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi that have not yet been arranged. No individual items belonging to the extremely large collection of materials on Shoyo (including manuscripts written in his own hand and letters he received) have been investigated; moreover, many of these items have not yet been assigned registration numbers. Artifacts relating to Shiko have been donated over many decades; these remain in their original condition, as it has not been possible to confirm their content or begin the task of arranging them. The plan for this research project involves first ascertaining the extent of the collection, and then investigating individual artifacts (in order of priority and time permitting). A detailed inventory will be prepared, contributing to future research.

Summary of the research findings

○ Shoyo Tsubouchi-related materials (letters sent to Tsubouchi)

A list of artifacts is currently being prepared, assigning a temporary number to each letter sent to Shoyo. The collection includes multiple letters contained within single envelopes, many of them in a poor state of preservation, with mold and other forms of damage. Work is progressing, although care must be taken when handling damaged artifacts. The plan is for the numbered letters to be grouped by sender and converted to digital-image data; we will then move on to historical investigation and reprinting.

This year's schedule involves taking pictures of around 800 of the approximately 1,800 letters that have not yet been catalogued. Most of the letters to be photographed will be letters written by relatives or the 84 people mentioned in the "Collection of Letters Written by Tsubouchi Shoyo," published in 2013. They are expected to be related to the letters included in the "Collection of Letters written by Tsubouchi Shoyo." It is hoped that conducting a historical investigation of these, investigating their content, and reprinting them, will, during the coming years, lead to new discoveries about the activities of Shoyo Tsubouchi, as well as his context and social interactions. These letters will also provide a valuable historical insight into the lives of Shoyo's correspondents, who were active in the cultural activities, theatre, and literature of the era.

○ Shiko Tsubouchi-related materials

5 of the 20 cardboard boxes containing the artifacts relating to Shiko have been opened, and the task of classifying the letters, photographs, hand-written memos, performance flyers, and related documents has begun. To the same extent as the Shoyo artifacts, the condition of many documents has deteriorated, making it necessary to carry out preservation work in conjunction with classification. This year, the work will focus first on grouping the letters by sender, and then on making a list of them.

While the content of the Shiko materials has not yet been fully ascertained, those parts of the collection already investigated include many valuable artifacts preserved from his student days in the United Kingdom and United States, as well as many valuable documents from his time at the Takarazuka Revue Company. Furthermore, Shiko's hand-written daily journal was discovered among the manuscripts. In the future, it is hoped that these materials will illuminate the activities of Shiko Tsubouchi and the people around him.

Selected research 2

Research on materials related to the presentation of silent films, and particularly their musical accompaniment

Principal Researcher: Seiji Choki (Professor, Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo)
Collaborative Researchers: Makiko Kamiya (Adjunct Researcher, the Theatre Museum, Waseda University), Fumito Shirai (Doctoral Program, Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo), Yohei Yamagami (Part-time Lecturer, Faculty of Music, Tokyo University of the Arts)

Research objective

The topic of this research is the Theatre Museum's collection of musical scores used to accompany silent films; its objective is to clarify how silent films were presented from the Taisho era to the beginning of the Showa era, with a particular focus on their musical accompaniment.

One feature of this research is that it employs the knowledge and methodologies of musicology, including detailed analyses of the musical scores and comparisons with recordings. The researchers are taking an inventory of the materials, creating a database, transcribing the manuscripts, and then comparing them to published musical scores, as well as collecting and examining related documents. Through this approach, they aim to reconstruct the way films were presented at that time, and to explain how the music and images were combined.

Summary of the research findings

The investigation has mainly been conducted by the researchers Shirai and Kamiya and the research collaborator Shibata Kotaro (Doctoral Program, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo), who have provided an overview of the materials. These materials are a collection of musical scores that were used to provide musical accompaniment for silent films from the middle of the 1920s to the start of the 1930s. From the signatures and seals indicating ownership, it is believed that they are parts of the scores used at the film theatre , "Goraku-kan" in Shinagawa, Tokyo. This theatre was directly managed by the Nikkatsu Corporation, and the scores were mainly used by a person named Hirano . As materials were numbered, in accordance with their condition at the start of the investigation (they had been kept in 2 cardboard boxes and a total of 14 bags), we now know that there are in excess of 600 items. Their content has been broadly categorized as follows:

① An untitled collection of hand-written music for a small, accompanying orchestra; this includes approximately 120 musical pieces (stamped with the seal of K. HIRANO)

② "Kino Music Nikkatsu Gakufu," unpublished musical accompaniment: 34 pieces of music written for a small orchestra

③ "Small Orchestra," domestically-published musical accompaniment: 25 pieces of music written for a small orchestra (Tokyo Small Orchestra Score Association, 1924)

④ "Cinema Inc. Series," "Berg's Inc. Series," musical accompaniment published in the United States: 110 pieces written for a small orchestra (Belwin Inc., thought to have been published in the second half of the 1910s)

⑤ Other materials (infrequently used parts, solo-part scores with the name of the film written on them, several cue sheets, etc.)

According to an interview with a specialist in domestic archives, this is the first discovery within Japan of a collection of musical scores for the musical accompaniment in use at that time. The analysis of the content of each of the collections is being carried out in parallel with the preparation of a temporary inventory. It has been found that the collections include many works by composers mentioned in contemporary discourses, such as Koka Sassa and Nobuhiro Matsudaira. Moreover, the collection published by Belwin, Inc. (④) is one of the main collections of musical accompaniment used in the United States at that time, and has shed light on the extent to which Japanese practices were connected to those overseas. Analysing the different instrumental parts (such as the piano accompaniment parts missing from the scores discussed in previous research), the combination of Japanese and Western characteristics in relation to harmonies and musical instrument settings are being examined.

One future task will be to realign these musical pieces with their film images. At present, in addition to analyzing materials that include examples of musical accompaniment for particular scenes, the name of the film on several cue sheets, and the Nikkatsu Gakufu(②), researchers are also inspecting related film pieces and collecting and analyzing materials, such as the weekly reports of the Shinagawa Gorakukan and pamphlets.

Selected research
3

Towards an archeology of projection media —The arrangement and publication of "magic lantern" slides and the organization of exhibitions and art works based on digital data

Principal Researcher: Ryo Okubo (Education and Research Associate, Public Collaboration Center, Tokyo University of the Arts)
Collaborative Researchers: Machiko Kusahara (Professor, School of Culture, Media, and Society, Waseda University), Eriko Kogo (Associate Professor, Meisei University School of Humanities), Manabu Ueda (Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science), Miyuki Endo (Doctoral Program, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University), Tatsuya Saito (Representative Director, Abacus Inc.), Kouta Kato (Education and Research Assistant, Art Innovation Center, Tokyo University of the Arts), Toshiyuki Kuwabara (Education and Research Assistant, Public Collaboration Center, Tokyo University of the Arts)

Research objective

The Theatre Museum has many image-related cultural materials from the prehistory of cinema that are extremely precious, even when viewed from the perspective of global media history. This joint research project involves systematically arranging the Theatre Museum's collection of "magic lantern" and "Utsusie" slides (the latter is a Japanese style of magic lantern popular from the late Edo to Meiji periods), and specifying the age and themes of these slides, which have never previously been catalogued. As well as completing this analysis, this research project aims to share and present its findings to the public through an exhibition, catalogue, and database, while exploring the value of these slides, and the option of using them as the basis for works of art and digital data.

Summary of the research findings

○ Investigation of the artifacts

The work began with an inspection of the Theatre Museum's magic-lantern slides, designed to obtain an overview of the artifacts and their state of preservation. The joint research team also inspected related materials, including the collection of slides, projectors, and trade catalogues belonging to Machiko Kusahara. Crosschecking the Theatre Museum's slides with trade catalogues is expected to help in identifying their ages and subjects. In the course of this inspection, it became clear that the projection equipment would need repair and restoration in future.

○ The Theatre Museum's slide catalogue

Approximately 250 items were carefully selected and arranged by theme. Now the main classification of images has almost been completed, and members of the joint research team and outside specialists are writing the explanatory notes. A catalogue is scheduled to be published by Seikyusha this semester.

○ The database of magic lantern slides

Work is currently underway to augment the data acquired while investigating the artifacts and compiling a catalogue of slides. Within the year, once additions have been made to the information already confirmed, we plan to update the database and publically release all of the image data extracted from the Theatre Museum's slides. For the future, a research team is investigating the option of consolidating image data from the Utsushie pictures and magic lantern trade catalogue.

○ Exhibition based on the research findings

A project exhibition will be held on April 1 at the Theatre Museum, showcasing research findings from the investigation of artifacts and the digitization of the Museum's collections. To prepare for an exhibition this fiscal year, the materials to be exhibited have been selected and explanatory notes prepared. In addition, a design team is preparing the main visuals and setting up a special website for the exhibition. The exhibition layout has been agreed, and adjustments are now being carried out, as the miniatures are prepared.

Selected research 4

The investigation and research into the Senda materials — Koreya Senda and contemporary plays

Principal Researcher: Yukako Abe (Associate Professor, Faculty of Arts and Letters, Kyoritsu Women's University)
Collaborative Researchers: Keiko Miyamoto (Part-time Lecturer, Department of Japanese Language and Literature, Shirayuri College), Terada Shima (Part-time Lecturer, Department of Japanese Language and Literature, Shirayuri College), Hirokazu Akiba (Professor, School of Creative Science and Engineering, Waseda University)

Research objective

Articles that belonged to Koreya Senda were donated by his daughter Momoko Nakagawa in April 2001. She donated a huge quantity of materials. In total, there were more than 300 cardboard boxes (at the time they were received) containing old books and play-related materials. These materials have been roughly classified and arranged; in particular, materials such as books, albums, scrapbooks, and cards have been available for viewing since 2005.

At the current stage, this constitutes nothing more than a temporary arrangement of the documents. It has not yet been possible to ascertain what this enormous collection actually contains.

At the same time, the condition of the materials is deteriorating; in particular, we have reached the point in time where the photographs must be rapidly digitized and the source materials stored appropriately.

This project relates only to a small part of the collection, and the objective is to confirm the content of the album, "J: related to Michio Ito" and performance-related materials, to classify these so that they can be used for researching Michio Ito and the Ernie Pyle Theater, and begin digitizing these materials.

Summary of the research findings

As research was conducted during a short time period of around two months, the researchers were only able to begin reviewing the Senda materials and verifying the content of 20 photo albums related to Michio Ito. Work is underway to digitize these photo albums and assemble the data for each individual photograph. Specifically, within the Koreya Senda collection, the J classification indicates materials related to Michio Ito; among these, J1-1 to J1-20 are the photo albums. The 20 albums have been given titles, such as "MICHIO ITO 1"; captions and endorsements of authenticity have been attached to many of the photographs. The construction of a photo database seems very achievable.

At the same time, the J classification includes many different types of materials, including some related to the Hollywood Bowl in which Michio was involved, and others related to the Ernie Pyle Theater or the Olympics. If progress can be made in unifying, digitizing, and arranging the various types of artifacts (including letters, name registers, memos, sketches, and scripts), then it will be possible to horizontally relate these materials. Without question, this will enable researchers to reveal a number of new findings. To make a start on achieving this, the current objective is to closely examine J23 (materials related to the Ernie Pyle Theatre), and to clarify their connection to various materials on musical performances, photographs, and Kisaku Ito set-design images, as well as the actual circumstances of the public performances.

編　集：小松加奈
翻　訳：カクタス・コミュニケーションズ株式会社
発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」
早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点
拠点代表：岡室美奈子
早稲田大学演劇映像学連携研究拠点
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1　早稲田大学早稲田キャンパス6号館
TEL：03-5286-1829　URL：http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/

Edited by: Kana Komatsu
Translated by: Cactus Communications
Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan
"Joint Usage/Research Center", Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University
Center Leader: Minako Okamuro
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University
Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-8050
(+81)3-5286-1829　URL: http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/